

とらうべ

書くことのすすめ

高嶋妙子

聖隷浜松病院・総婦長

私は他人に何かをすすめるよりも、他人からすすめられることのほうが圧倒的に多い人間である。またすすめられてもなかなか試みることさえしないという頑固なところがある。他人からよく活発だとか行動的だと言われるが、本性は狭く消極的な人間なのである。

このような私がためらいなく他人にすすめることが2つある。それは「自然の中に身を置くこと」と「書くこと」である。前者は素直な自分を取り戻すためであり、後者は今の自分を確認し新しい自分を創るためである。この繰り返しが人間にとっての成長であり、人生を生きるということなのだと考えている。であるから、私にとってこの2つは食べることや寝ることと同じように、生活の中に溶け込んで欠くことのできないものになっている。それでも「書くこと」には、いささかなりとも意識的な向かい方が必要のようである。

ところが、我儘な私が意識的に努力できるのは、その過程が楽しい時に限る。いかに素晴らしい結果が保証されていても、プロセスが苦しいと、私は努力し続けることはできない。甚だ軟弱な情けない人間である。その代わりというのもおかしいが、プロセスのあらゆる瞬間を堪能する。それが「今、ここを、十全に生きる」ということでもあると思っている。

ということから、「書くこと」そのものを楽しんでいる。この楽しさを知ったのは中学生時代、少女雑誌の読者欄にあった文芸サークルに参加したことに端

を発する。古き良き時代で、「真珠」とか「白百合」という同人誌の常連投稿家となり、ペンネームで、小説もどきを書いていた。ファンレターとか読み手の反応に励まされ、ストーリーを考えたり一行の表現に悩んだりすることが、飽くことなく楽しかった。

他愛ないこの初体験が、私の身体に染み透ったのだろう。年を重ねるほどに、書くことから得る喜びが深まっていった。

「書くこと」によって自分を創ったり確かめたりしながら、私は主たる任務であった管理の責任をも果たしてきた。私が実践した管理は一言で言えば、部下がしたいことが実現できるように支援したのである。「したい」を発見するためにはその本人が書き、口にしたことを私も傍らで書き取ってやり

とりした。

自分の思うことを正確に表現できる言葉探しは楽しい。思うことが曖昧なために言葉が見つからないこともある。私など、思考のプロセスが途轍もなく飛躍してしまうので、書くことによって隙間を埋める。「解った」とか「同感」とかいうことは多々あるが、そのままにしておく片端から忘れてしまう。感動をとどめるためにも書くことは役に立つ。

辻褄が合う人間、一貫性のある人間でいると、ありのままに生きることができ、生きることがとても楽になる。そういう人間になっていくためにも書くことが役立つ。人間と書くことは切り離せないのではないだろうか。

